

3. 2年保育4歳児K児

忍久保 武士

K児は、本園が初めての集団生活である。そのため、園生活に不安を感じ玄関で母親と別れることができずにいた。毎朝、保育室まで母親と一緒に登園していた。教師に対しては自分の思いを話すことができるが、友達に対しては声をかけることができずにいた。K児の様子から、友達に興味をもち自分の思いを伝えたいと思っているものの、どう伝えればよいのか戸惑っているように思えた。今後、K児が自分の思いを友達に伝えることができるようにと願い、友達とかかわろうとしているときのK児の思いを探っていきたいと考えた。

事例1 「先生、今日もあーそーぼ？」

4月16日（月）

入園して1週間がすぎたが、この日もK児は保育室の前で母親のズボンをぎゅっと握りしめていた。どうやら母親に先に保育室に入って欲しいようで、母親を押しているようだった。そこで、教師は側に寄りK児に声をかけた。

教師 「K児くん、おはよう」

K児 「・・・・・・・・」

K児は母親のズボンを握ったまま、教師の顔を見ていた。挨拶をしたいのだけれど、今一歩、勇気がでないという感じだった。その様子を見て母親がK児に挨拶をするように促していた。そこで、母親にも明るく声をかけた。

教師 「お母さんも、おはようございます」

母親 「先生、おはようございます。今日もよろしく申し上げます」

教師 「はい。(K児に視線を移し) K児くん、今日もいっぱい遊ぼうね」

その言葉を聞いてK児は母親を見た。そして、鞆の中から連絡帳を出して、すぐに読んでといわんばかりの表情で教師に見せた。母親の様子を伺うと、母親は頷いていた。

教師 「連絡帳だね。お母さん書いてくれたの？じゃあ、読むね」

K児と一緒に見ながら、二人に聞こえるように読んだ。『先生、いつもありがとうございます。昨日の参観で、園での様子が分かり少し安心しました。K児も少しずつ慣れてきたようです。今は、黄色と黒のブロックで遊ぶのが好きなようです。』文面を読み終えてK児を見ると、K児は本日初めての笑顔を見せた。教師も笑顔で答えた。

教師 「・・・・・・・・K児くん、お母さんが書いてくれたこと分かったよ」

K児は嬉しそうに母親をちらっと見た後、もう一度教師を見た。

K児 「先生、今日もあーそーぼ？」

教師 「いいよ。今日もブロックのところへ行く？」

K児 「うん、ブロックのところ行こっ！」

K児は自分から母親にバイバイと手を振ると、ロッカーへ鞆をかけに行っただ。教師も母親に目で合図を送ると保育室へ戻った。K児は素早く支度をし終えると、教師と一緒にブロックコーナーへ向かった。

(1) K児の自己表現のあり方

○教師を遊びに誘う表現

入園当初、K児は園内で自分の居場所を見つけることができず、母親を唯一の拠り所としていた。そのため、教師がK児にとって少しでも安心できる居場所になればと考え、かかわってきた。この日、K児は初めて自分から「今日もあーそーぼ」と教師を遊びに誘ってきた。これまで一緒に遊んだことで、K児にとって教師が少し身近になったことを感じ嬉しく思った。また、K児は教師と安心したように話す母親の姿を見て、教師が安心できる存在だと感じ、K児も声をかけることができたと考える。

(2) K児の社会的側面の学んだこと

○教師がかかわってくれる安心感

集団生活が初めてのK児は、教師と一緒に遊ぶことにも緊張していた。教師は、K児が教師と一緒に遊ぶ楽しさを感じながら、安心して園生活を送って欲しいと願った。そこで、教師からK児をブロック遊びに誘った。K児は教師が声をかけてくれたことで少し安心し、遊びに向かうことができた。

○教師に対する信頼感

K児は、母親と離れて園に入ることに不安を感じていた。その姿をK児の母親も心配していると教師は感じた。まず、母親が安心することでK児も安心して園生活を送ることができると考え、教師は母親と明るく挨拶をしたり、教師とK児が楽しく遊んだことなどを伝えたりしてきた。その様子をK児は嬉しそうに見ていた。本事例では、教師が母親もいる場で連絡帳を読むことでK児の思いを受け入れた。そのことが、園と家庭とを結ぶことになり、K児の教師への信頼の芽生えになったと考える。

(3) 今後に向けて

安心して園生活を送ることが出来るように、教師がK児の心の拠り所となるようにかかわっていく。そのためにも、教師と一緒に遊ぶ楽しさを十分に経験させたい。また、K児の遊びの様子からブロック遊びのように、つくる目的がはっきりしていると遊び始められることがわかってきた。そのような遊びの環境を多く用意し、K児が自分から遊び出すことができるようにする。

事例2 「お母さんとたくさん新聞紙入れた」

5月22(火)

K児は保育室前の廊下で母親と手を振って別れ保育室に入ってきた。表情が少し硬かったが、教師が遠くから「K児くん、おはよう」と声をかけると、ニコツとして近づいてきた。

K児 「先生、おはよう。これ、(見て)」

K児は手に持った紙袋を教師に差し出した。早く教師に見て欲しそうな、それでいて少し不安な顔をしている。

教師 「K児くん、おはよう。紙袋に何か入っているの？見ていい？」

K児 「うん。牛乳パック (のレンガ)」

教師 「あらっ、3つも入っている。どうしたの？」

K児 「レンガの家」

教師 「レンガの家を早く完成させようと思って、お家でもつくってきたんだね」

教師とK児が話しているのを近くで見ていたF児が興味津々の顔でのぞき込んできた。

F児 「ねえ、なに、なに？先生、これ、どうしたん？」

教師 「これはね、K児くんがお家でもつくって持ってきたんだよ」

F児 「へえー、これ全部？」

K児 「うん」

話しながら、F児と教師は牛乳パックのレンガを1つずつ手にとって見た。その様子をK児はじっと見ている。

教師 「このレンガ、とっても堅いね」

F児 「ほんとや、それに、なんか重たい」

K児 「お母さんとたくさん新聞紙入れた」

急に、K児の顔が生き生きとした。

K児 「先生、着替えたらレンガの家に行こう！」

F児 「おれも行く！」

教師 「よーし、先生もK児くんみたいに堅いレンガをつくらーっと！」

K児とF児は着替えると、すぐにレンガの家に向かった。つくりかけの壁にF児「ここいいねー」K児「次、ここー」とつくってきたレンガをくっつけた。その後、教師も一緒になってレンガづくりを続けた。

(1) K児の自己表現のあり方

○教師にかかわりをもとめてきた表現

入園して1ヶ月が過ぎ、K児はお家ごっこに興味を持ち始めていた。そこで、教師は牛乳パックをレンガに見立てて家づくりを始め、K児が他の幼児と思いをし合いながら集える場になればと願った。前日、K児はだれよりも多くのレンガをつくり、明日も続きをしようと教師に伝えて帰っていった。そして、この日は登園するとまっすぐに教師の元へ向かってきた。「これ」「牛乳パック」「レンガの家」と単語での会話だったが、K児が自分から伝えようとしている気持ちが嬉しく、教師は言葉を補いながらK児の思いを聞いた。

○ものを媒介に教師とかかわっている表現

母親の連絡帳から、K児が家へ帰ってからも幼稚園の再現遊びをすることが多いということを知った。レンガの家づくりの遊びも、家で母親と一緒にレンガをつくっていた。K児は、教師や友達に母親とつくったレンガを「堅い」「重たい」と認めてもらえたことを、大変嬉しく思い自信をもつことができた。だからこそ、教師だけでなく友達にも「お母さんとー」とレンガづくりの説明をし始めたと考える。

(2) K児の社会的側面の学んだこと

○教師や友達が受け止めてくれる嬉しさ

お母さんと一緒につくったレンガを教師や友達に認めてもらえたことで、K児は表情が生き生きとした。K児は教師や友達が受け止めてくれる嬉しさを感じたのである。教師は、K児の頑張っている姿を受け止めることで思いを自然に出せるようになってほしいと願っている。今後もK児と一緒にかかわりながら、その時その時にK児が感じた思いを出させ受け止めていくことが大切だと考える。

(3) 今後に向けて

今後、K児がF児と遊びの中でどのようなかかわりがあるかを追っていく。また、ひきつづき園生活を安心して送れるように教師と一緒に活動する。そのなかで、K児に自分を認めてくれた友達と一緒に遊びたいという気持ちの芽生えが見られたときには、関係をつなぐようにかかわっていく。

保育室に段ボールで忍者基地をつくった。すみれ組男児を中心に毎日のように基地に集まり、修行をしたり宝を探しに出かけたり、剣や手裏剣を新聞紙などでつくったりして遊んでいた。この日も忍者の衣装を身に纏い、B児、K児、D児、F児らは忍者基地に集まってきた。そこへ、C児が廊下から急いで戻ってきて基地の前で大声で叫んだ。

C児 「大変だ、プレイルームに悪者忍者がいたぞ！」

教師 「なに、悪者忍者がいたって？」

B児 「早く倒しに行かなくちゃ」

F児 「おれ、行ってくる」

F児とC児が走ってプレイルームの方へ向かった。D児、K児は一瞬ためらった表情を見せ、忍者仲間の教師の様子を伺っていた。

教師 「C児忍者、場所はどこだ？倒しに行くぞ！」

C児 「こっちだ、来てくれ」

教師 「よし、みんなでやっつけに行こう」

教師も一緒になって悪者忍者（柱などを見立てたもの）と戦った。それを見ていたK児とD児も、剣で闘う真似をしたり手裏剣を投げたりしていた。戦いが終わるとみんなで基地に戻り、B児、C児、F児は状況を報告し合っていた。その様子を、K児、D児は黙って聞いていた。それから、K児は友達の後ろをついてまわり真似をしていた。

何度目かの戦いが終わって教師が基地に戻っていると、廊下から保育室に入ってきたK児が大きな声で教師に向かって言った。

K児 「先生忍者、うさぎ組に敵がいたでござる」

K児の足はうさぎ組にむいていて、すぐに行きたいという様子だった。

教師 「なに、今度はうさぎ組か。わかったぞ」

教師が他の忍者にも伝えようとした時には、すでにB児、C児、D児らは基地から出て行っていた。口々に「今度は、うさぎ組だって」「うさぎ組に行くよ」などと言葉を掛け合っていた。

教師 「今度は、みんなに任せたよ。気をつけて行ってきてね」

B児やD児らは「分かったでござるよー」などと言いながら走って行った。二人の様子を見て安心したK児は、一呼吸置いて「行ってくるでござる」と教師に笑顔で言って後を追っていった。

(1) K児の自己表現のあり方

○仲間を意識した表現

忍者独特の「一でござる」「にんぼう一の術」などの言葉は、仲間意識を感じる仲間だけの共通語である。K児は、これまで教師や友達のやっていることを真似て遊んでいたが、自分から「うさぎ組に敵がいたでござる」と声をかけることができた。それは、K児が忍者の衣装や剣など仲間と同じアイテムを身につけていたこと、教師も仲間として一緒に遊んでいたことで、安心して遊ぶことができたからである。K児の忍者言葉を周りの忍者たちが自然と受け入れてくれたことで、K児は嬉しさを感じるとともに自信もつけたと考える。このようにK児には、自分の思いが教師だけでなく友達にも受け入れられる経験が積み重ねられることが大切である。

(2) K児の社会的側面の学んだこと

○教師や友達と同じ格好をして遊ぶ楽しさ

これまでK児は衣装を身につけずに剣や手裏剣をつくることを楽しんでた。教師は、友達と一緒に遊んで欲しいと願った。そこで、教師が忍者の衣装を着て仲間になって忍者ごっこをした。K児は、教師が衣装やアイテムを身につけて忍者になりきっているのを見て、K児は安心して忍者ごっこに加わることが出来た。さらに、忍者の衣装を着たK児を周りの忍者は仲間として受け入れてくれた。そのため、K児は大きな動きで教師や友達の真似をするようになった。

○教師や友達と同じ動きを繰り返す面白さ

これまでK児は、何かをつくるというように目的がはっきりしている遊びを好んでしていた。しかし、ごっこ遊びのように、その時々によって目的が次から次へと変化していく遊びには加わらなかった。今回、教師が忍者仲間の一人として遊んでいたためK児は遊びに加わったと考える。忍者ごっこでは、剣や手裏剣でたたかったり、修行をしたり、こっそりと偵察に出かけることが多かった。教師や友達と同じような動きを何度も繰り返すことで、K児は遊びに見通しが持てたと考える。そのため、教師がいない場へも友達と出かけていくことが出来た。

(3) 今後に向けて

遊びの見通しが持てることで、教師がいなくても友達と遊び続けることができた。K児にとってD児も安心できる存在になりつつある。今後、K児とD児の関係をさぐっていきいたい。また、K児が他の友達に対しても自分の思いを出せるようにかかわっていきいたい。

日曜日の保育参観で、K児は父親と一緒にドングリ迷路づくりをした。次の日は、すみれ組の幼児を中心にお客さんがたくさん集まり、その場集ったメンバーで決めた『一人2回ずつ転がす』というルールで遊んでいた。

この日は、ドングリ迷路を始めて3日目である。K児はD児と一緒にドングリ迷路のコースをセットしたり椅子を並べたりしていた。一通り用意し終わると、D児がK児に耳打ちした。

D児 「いらっしゃいませー。ドングリ迷路オープンしました」

K児 「いらっしゃいませー。ドングリ迷路オープンしました」

保育室中に聞こえる声でD児が言い、その後にK児も続いた。少し離れたところで見えていた教師と目が合うと、K児は手招きをして教師を呼んだ。

D児 「いらっしゃいませ、こちらです」

K児 「何歳ですか？」

教師 「えっ？」

K児は手に10個ほどドングリの入った箱を持ち、わくわくした表情で返事を待っていた。

教師 「何歳か、知りたいの？ どうして？」

K児 「だって、ドングリを渡すから」

教師 「ん？」

K児 「何歳かで、ドングリがたくさんあたります」

教師 「なるほど。先生は29歳です」

K児 「29歳ですか。・・・じゃあ、9個(ドングリが)あたります」

教師 「昨日と違って、9個ももらえるの。うれしいな」

少し離れたところで教師とK児とのやりとりを見ていたG児が近寄ってきた。

G児 「次、Gちゃんもしたい」

D児 「わかりました。こちら(並んで待つ椅子)に座って下さい」

K児 「何歳ですか？」

G児 「5歳です」

K児 「じゃあ、5個あたります」

K児「1, 2, 3, 4, 5」とドングリを数え「はい、どうぞ」とG児に手渡した。そして、教師とG児がドングリを転がすことになった。D児とK児は、教師やG児が転がしたドングリがどこに入ったかを確認して、「100点でーす」「残念」「ここは50点よ」

などと言っていた。G児と教師はK児やD児の声に呼応するように「おいしい」「やったー」と楽しんだ。

教師 「ルールが変わって、点数がたくさん入ったね。きのうよりもっと面白かった」
G児 「私500点やって。たくさん入ったわ。また、来ます。ありがとう」

そう言うと、G児は走っていった。それを聞いたK児とD児は二人で顔を見合わせ笑顔になった。そして大きな声を張り上げ、K児「いらっしやいませー、ドングリ迷路やさんでーす」、D児「いらっしやいませー」と二人で何度もお客を呼んでいた。

(1) K児の自己表現のあり方

○自分の言葉で伝える表現

最初、K児はD児の「いらっしやいませー」に合わせて、自分も「いらっしやいませー」と言っていた。二人の様子からD児がK児と一緒に言うように誘ったからだと思われる。しかし、2度目の「いらっしやいませー」では、自分から大きな声で言っていた。教師や友達が遊びに参加し、認めてくれた嬉しさをD児と二人で分かち合うことができた。そのことが大きな自信となり、2度目の「いらっしやいませー」の表現につながったと考える。

○遊びの方向性を決めている表現

K児の「何歳ですか?」という言葉は、昨日までの遊びからはつながりのないものである。しかしK児の表情から何か考えがあるのだということを察し、教師も期待しながら話を続けた。教師がお客になって聞くことで『年齢分のドングリを転がすことができる』というルールであることがわかった。K児は自分で考えたルールを教師や友達が受け入れてくれたこと、そして、そのルールで遊んで喜んでくれたことで自信をもつことができた。そのことは、D児と顔を見合わせて笑顔になったり、はりきって客引きをしたりしていることから伺うことができた。

○臨機応変に遊びをつくっていく表現

「何歳ですか」「29歳です」「じゃあ、9個(ドングリが)あたります」というやりとりは、いままでのK児にとっては考えられない対応だった。なぜなら、『年齢分ドングリを渡す』というルールを実行するためには、ドングリが足りなかったためである。また、29回もドングリを転がすのが大変だと考えたのかもしれない。今までなら回答に困ってしまうところを、K児は臨機応変に「9個」と言えたことを教師は嬉しく思った。

(2) K児の社会的側面の学んだこと

○自分のつくった場を教師や友達に認められた嬉しさ

K児は教師がいなくても自信を持ってやり方や点数などをお客に伝えていた。それは、このドングリ迷路は参観日に父親と相談しながらつくった遊びだからである。その自分のつくった

ドングリ迷路が教師や友達から「おもしろかった」「たくさん入ったわ」と認められた。K児とD児の表情からも教師や友達に認められた嬉しさを感じていると言える。

○気の合う友達と一緒に遊ぶ楽しさ

これまでもD児とK児は一緒に遊んできた仲間である。そのため、K児はD児がいることで安心して遊びをすすめていた。K児とD児は椅子にお客を案内する、ドングリを渡す、点数を計算するなどの役割を自然と分担していた。そのような関係での遊びにK児は楽しさを感じることができたと考える。

(3) 今後に向けて

K児が教師を介さなくても自分の思いを出せるようになってきたD児との関係をさぐっていく。その中で、お互いに自分の思いを出し合える関係になるようにつないでいく。また、K児が他の友達に対しても自分の思いを出せるように、引き続きかかわっていく。

事例5-1 「・・・よいしょ。よいしょ。よいしょー」

2月21日(木)

運動着に早く着替えたH児、F児と教師はプレイルームで迷路をつくっていた。前日までのイメージが残っているようで、F児もH児も自分の積み木や巧技台を好きな場所へ運んでいた。そのうちにF児が教師の元へやってきた。

F児 「先生、大きいはしごとすべり台も使いたい」

教師 「いいよ、でも、一人じゃ運べんねえ」

F児 「誰か、手伝ってくれんかなあ」

F児はプレイルームを見渡した。そこへ、着替えが終わったK児とL児がやってきた。

K児 「いーれーて」

L児 「いーれーて」

F児・H児 「いいよ」

F児 「そしたら、はしご運ぶし、そっち持って」

勢いに任せてF児は運ぼうとした。K児、H児、L児もすぐに遊具の端々を持って運び始めた。F児が「そっち。もう少し、そっち行って」、「そこに、はしごくっつけて」、「よし、次、すべりだい」と友達に指示を出していた。K児、H児、L児はF児のペースについていくので精一杯という感じだった。しかし、すべり台を運ぶために持ち上げようとしたとき

F児 「そっち持ってよ。せーの」
H児 「・・・せーの」
F児 「！！・・・せーの。せーの。せーの」

F児とH児の声のタイミングが合わなかったが、それが面白かったらしくF児は御神輿を担ぐように「せーの。せーの。せーの」と繰り返し始めた。F児の声に合わせて、H児とL児も「せーの。せーの。よいしょ。よいしょ」と声を合わせてすべり台を運ぶことが楽しくなった。K児は、その雰囲気やに圧倒されたような顔をしていたが、みんなの楽しそうな様子に笑顔になり声を合わせて「よいしょ。よいしょ」と運ぶようになった。それからも、平均台やビームなどを声を合わせて運びながら迷路をつくった。

事例5-2 「あの一、すべり台をすべるまではいいんだけど、ここ（その先）は、
これからもつくるから・・・」

2月21日（木）

F児、H児、L児、K児が楽しみながら遊具を運び、迷路の大部分が完成してきたとき、着替え終わったJ児がやってきた。

J児 「あの一、迷路やってもいいですか？」

J児は自信なさげに小さな声で聞いた。J児の声に気づいたK児が一呼吸置いて答えた。

K児 「今、つくっているところなので、まだ、できま・・・」

F児 「ここ（すべり台の下のマット）までならいいけど。ここから、おれら今から平均台と積み木運ぶし、むり！」

K児が言い終わらないうちに、F児が身振り手振りで話し始めた。J児はF児に断られたと思いがっかりした表情になった。F児の話を聞いたK児が、がっかりしているJ児に近づいていった。

K児 「あの一、すべり台をすべるまではいいんだけど、ここ（その先）は、これからもつくるから・・・」

説明をしながらK児は上手く伝えられないと感じたのか、しだいに声が小さくなっていった。

教師 「マットの向こうは、工事中ってことですか？」

K児 「うん、そうです。工事中です」

K児は『その言葉』というような顔になって教師に答えると、もう一度J児の方を向き、今度ははっきりと答えた。

K児 「やってもいいですが、今は工事中だからここまでです」
J児 「ありがとう」

J児の表情が明るくなり、迷路に挑戦し始めた。K児は嬉しそうな顔でしばらくJ児の様子を見ていたが、また迷路の続きをつくりはじめた。

(1) K児の自己表現のあり方

○仲間意識を高めた表現

これまでK児は、グループ活動で自分から声をかけることがほとんどなく、自分で友達の呼吸に合わせて机を運んでいた。何度も大型遊具を同じメンバーで運んだことで、次第に仲間意識が高まっていった。そのためK児は「よいしょ。よいしょー」と声を合わせて楽しい雰囲気共有しながら遊具を運ぶことができたと考える。

○友達の思いを意識した表現

K児はJ児とF児の双方の気持ちが分かったのであろう。だから、K児は「ダメ」「やってはいけません」「できません」「無理」などの言葉を使わないで、J児に伝える言い方を考えて悩んだ。思うような言葉が浮かんでこず途中で言葉を詰まらせたが、教師の「工事中」という言葉を聞き、J児が納得するまで話を伝えることができた。

○仲間の思いを代弁した表現

最初、K児は「迷路づくりは途中だからやってはいけない」と考えJ児に伝えようとした。しかし、F児が「ここまでならいい」という考えを伝えようとしていることを聞いて、自分の考えと違うことに気づいた。それまで、楽しい雰囲気でも迷路をつくっていた仲間のF児の言葉だったため、K児はJ児に代弁しようと考えたのである。

(2) K児の社会的側面の学んだこと

○友達と声を合わせて遊具を運ぶ面白さ

これまで、K児は一人では運べない遊具を使いたいと思ったときには、教師を誘ったり、誰かが声をかけてくれるまで一人で持って待っていたりした。この日は、最初は友達に言われるがままに遊具運びを手伝った。しかし、何度も4人で遊具を運ぶことで仲間意識が高まった。

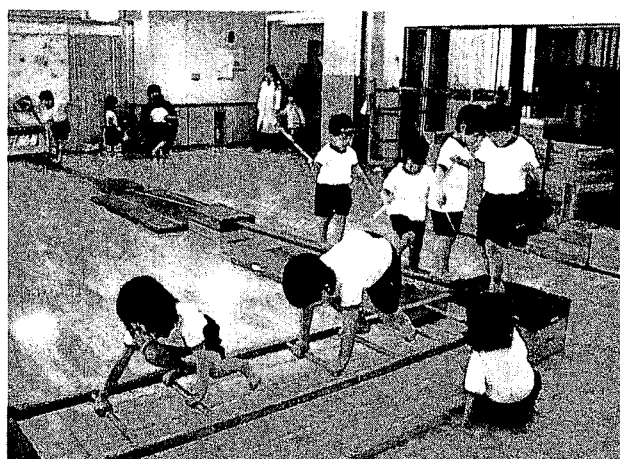
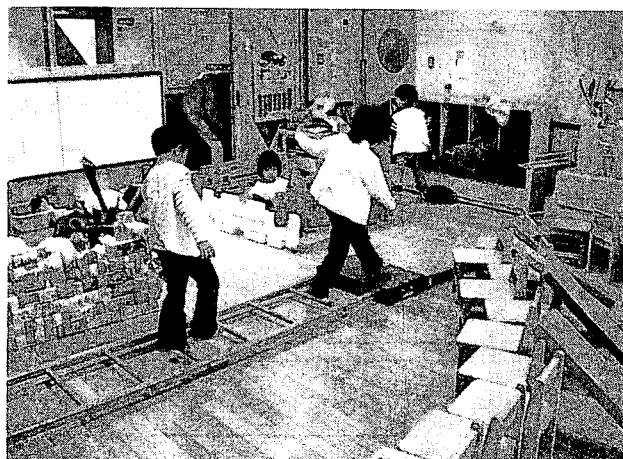
K児はその楽しい雰囲気には最初は少し戸惑ったが、自然と自分から声をかけるようになった。みんなで声を合わせながら重い遊具を好きな場所へ運ぶ行為自体の面白さを学んだと考える。

○友達が喜んでくれた嬉しさ

K児が迷路のことをJ児に伝え誤解が解けたため、J児は嬉しそうに迷路に挑戦することができた。K児は、迷路に向かっていくJ児の姿を見て、声をかけて良かったと感じたのであろう。友達が喜んでくれたことを嬉しく感じていることが伺える。

(3) 今後に向けて

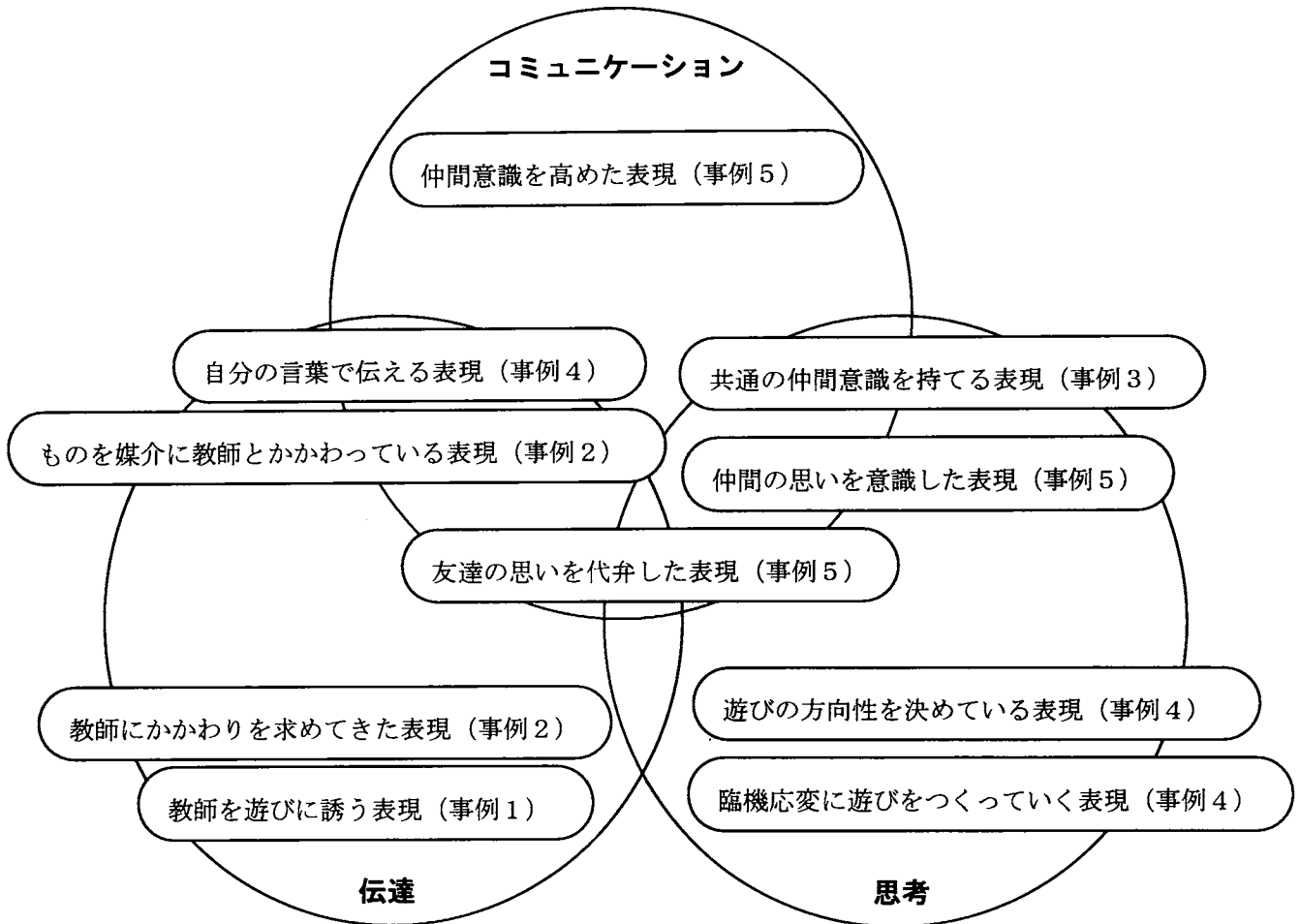
K児が友達とのかかわりの中で、自分の思いを出して良かったという成功体験を繰り返し、自信を深めていって欲しい。今後も、仲間意識を高められるようなK児と友達とのかかわりをさぐっていく。



～ 一年を振り返って ～

事例を検証する中で、一人一人の自己表現のあり方が、「伝達」「コミュニケーション」「思考」の3つに分けられるのではないかと考えた。K児の自己表現のあり方から見えてきたキーワードをその3つに分類して位置づけ、その図及び各事例より見えてきたことを考察する。

<K児の自己表現の様相>



○考 察

入園前、集団生活の経験がなかったK児は、母親と別れて幼稚園に入ることに戸惑い、友達に対して自分の思いをどのように伝えればよいか困っていた。1学期、K児が安心して園生活を送ることができるようにと考え、遊びに必要なものをK児と一緒に作りながらK児の思いを受け入れたり代弁したりしてきた。また、同じく不安を感じていた母親にもK児の園での様子を伝えたり、悩みを聞いたりするように努めた。それにより、K児は「教師とレンガの家を

つくりたい」と遊ぶ目的をもって登園してくるようになり、教師に対しては自分の思いを積極的に伝えようとする姿が見られた。

2学期、1学期の教師と一緒に遊んだ楽しかった思いをつなげながら、友達に対しても自分の思いを出して行って欲しいと教師は願った。そのためには、友達と一緒に遊ぶと楽しいということを体で感じて欲しいと考えた。そこで、忍者の衣装や剣など友達と同じものを身につけて遊ぶことが出来るように用意したり、K児と友達をつなぐ言葉がけをしたりしてきた。そうすることで、友達から仲間の一因だと認められるようになり、教師を介さなくても友達に対して自分から言葉を発するようになってきた。

3学期には、仲の良い友達と同じアイテム、衣装を身につけて遊んでいく中で、自分から遊びの場をつくって楽しむようになってきた。K児のつくった場の面白さが教師や友達に認められ、そのことをK児はとても喜んでいて。次第に、K児は自信をもって友達とかかわるようになってきた。その中で、K児は友達の思いを受け入れながら、自分の思いを自分の言葉で伝えようとするようになってきた。

